

『抗日パルチザン参加者たちの回想記』読書会 vol. 9

彼は約束した場所を訪れるのも怖いし、そうかといって行かなければそれによって今後に及ぼすことがまた心配にならざるを得なかった。まだ決心がつかない彼は、体の具合が悪いという口実で、その日から布を頭に巻きつけて床についてうんうんうなり始めた。——チェ・ヒョン「〈オン署長〉が選んだ道」

このように文字を彫った木板にローラーで謄写インクや墨を塗り、紙を置いて別のローラーでこすってみた。すると立派に印刷ができた。紙の十六分の一の大きさの木板一枚に四号活字ぐらいの小さな文字で普通百～二百字、さらには三百字まで彫ることができた。スローガンのようなものは大きな文字を数個だけ彫ればよかった。——リュ・ギョンフィ「全てを革命偉業に捧げて」

日時 **6月8日**
(日) 午後1時15分～4時半

場所 **赤羽北区民センター**
赤羽北ふれあい館 第1和室
(アクトピア北赤羽六号館3階)
東京都北区赤羽2-25-8
JR埼京線北赤羽駅赤羽口から徒歩1分



参加費 ひとり **500円** (要予約)

主催(予約) **前田年昭** tmaeda1966516@gmail.com 電話 080-5075-6869

13:30～15:00 報告 **田代ゆき** (新聞組版労働者) / 討議

〈オン署長〉が選んだ道

第5巻第21話 チェ・ヒョン

キム・イルソン同志の教えを掲げて

第8巻第9話 ユン・テホン

15:00～16:30 報告 **前田年昭** (組版労働者) / 討議

全てを革命偉業に捧げて

第11巻第15話 リュ・ギョンフィ

革命的出版物—〈三・月刊〉

第10巻第8話 キム・ギョンソク

○参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。当日は報告者の問題提起と、感想や意見の交流、討議を行います。あらかじめ対象テキストを読んできてください。

私たちはおとしの5月から『抗日パルチザン参加者たちの回想記』(朝鮮労働党出版社刊、鈴木武訳)を読んできました。この本は、1930～40年代、日本の侵略に抵抗した朝鮮人民による抗日武装闘争の回想記です。

全264話のなかから各自が選んだ回想記について報告し、参加者と討議を重ね、折りに触れて関連する文献を読む回をはさみながら続けてきました。ことしの3月の第8回では、キム・サンテ『ある被抑圧者の手記』をとりあげ、戦前からの在日朝鮮人労働者と日本人労働者との国際主義的闘いの歴史を学びました。第9回は、ふたたび『抗日パルチザン参加者たちの回想記』に戻ります。

なぜ、国境のない労働者のなかに排外主義が生まれ、分断されてしまうのか。排外主義を克服するた

めにはどうすればよいのか。階級と民族との関係はいかにあるべきなのか。

日常茶飯の、具体的な関係のなかで、加害の歴史を背負う抑圧民族の労働者として、日々の判断を誤ることのない〈見る目、感じる力〉はどうすれば身につけることができるのか。訳者・鈴木武さんが邦訳を始めた半世紀前とくらべて、私たちをとりまく状況と課題は何ひとつ解決していません。それどころか、国際的にも国内的にも状況はむしろ悪くなっています。

抗日パルチザン闘争と「在日朝鮮人運動と日本人民の墮落」、そのなかで連帯をめざして試行錯誤した少数の先人の闘いを知り、学ぶことは、私たち自身の生きる糧です。労働者に国境はありません。ともに読み、考え、話し合ひましょう。

『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターの

ウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で読めます。QRコードは⇒

264話全訳データは <https://fire.st/h6yq1ut> にあります。



党ゆえに失敗するが、党ゆえに正しい

須田光照

第8回読書会では『抗日パルチザン参加者たちの回想記』からいったん離れて、在日朝鮮人・金相泰の『ある被抑圧者の手記』(とくに座談会部分)をテキストにして報告した。

「民族か、階級か」の議論は左翼運動でくり返されるが、「日本共産党の日本革命の闘いが、朝鮮人民をも解放する主要な側面」と主張する金の立場は明確に「階級」であった。

民族問題を無視したのではない。被抑圧民族としての自己を真に解放するために階級の立場を選ぶという緊張関係をくぐつての結論で、だから金の立場の鮮明さが際立っているのだ、という参加者の意見に共感した。日本の労働者人民はどうだったか。中野敏男『継続する植民地主義の思想史』(2024年12月)を参照する形で、米国に占領された「日本民族の被害」を強調する共産党の綱領的変質が日本革命と在日朝鮮人運動の分離をもたら

したと報告した。金たちが差し伸べていたプロレタリア国際主義の手を握り返せなかった思想的弱さがあったと思う。討論は党に及んだ。中央集権の党に対する金の絶大な信頼の態度に「うらやましい」という感想が述べられた。一方で「無謬の党」への物神崇拜に

第七回読書会での報告を受けて

「下層に依拠する……」に共感 土田宏樹

須田さんの報告でことに印象に残ったのは、金相泰の「中産化した日本の労働運動の中で、下層という存在に依拠する」ということは……という発言をレジメにも書き留めておられたことだ。私もその言葉が心に響いた。須田さんはそういう思いで東部労組の活動を牽引してこられたのだろう。ところで座談会では全協のことが何箇所か出てくる。共産党の指導の下、合法労組の中で革命的反対派を組織することを目指した。私はこの春、佐多稲子が1930年前後

つながりかねない、という意見も出た。1955年の六全協後に離党となった金はずでに民族主義が前面化した党であつても自分からは離れようとしなかった。党が間違っていないからではなく間違いを正していく力が党にはあると信じたからではないか。

読書会後の交流会で聞いた「党ゆえに失敗する」という言葉が印象に残つた。レーニンが書いてい

るように、誤りをおかさなない者は何もしない者だけである。人民の先頭で闘いを切り開いていく前衛党が誤りをおかさなないことなどあり得ない。失敗や誤りを含めたすべての歴史を背負い、それを教訓にしながら「正しい道」を指し示すことが党の役割であろう。党ゆえに失敗する。しかし、党ゆえに正しい。そんな党をわれわれは手にする必要がある。

「一国一党」はこれまでも、社会主義や共産主義は間違いだという例証として挙げられてきた。日本での社会主義・共産主義運動の誤りも、国際共産党日本支部、つまりコミンテルンの誤りだと説明されてきた。しかし、からだをはって闘いぬいたキム・サンテ

の涙(その他)では工場であつた亀戸は金が生活し闘つた地域。1907年生まれ金の04年生まれの佐多は、同じ時代を近い場所で生きたのだなと感じ入つた。

「二国一党」批判のなかには、残された私たちへの課題があることは確かだが、コミンテルン支部としての日本共産党と全協には国際主義が貫かれていた。キム・サンテの、「連帯は政治思想の現実」「要するに、生産現場で

どう闘うのかという問題です。……このような観点から、日本の労働現場にいまはないわけです。だから、組合幹部や活動家の集団にすぎない(197ページ)という指摘は、日本の労働運動が労働者のなかに根を下ろせていな

い原因への批判であり、国際主義を実現する基本を教えている。誤りや不十分も含めてただ一つの党に、その国の労働者人民、民族の共産主義運動の水準が集約されており、そのような党が今、切実に求められる。

「党」の実感を持つてぬ今

田代ゆき

以前、「朝鮮人が利用された」ということになれば、私は何のために生きて来たのかわからなくなつてしまう(188ページ)という金相泰の言葉を須田さんから聞いたとき、

国際主義の旗は下ろされ階級は消え、日本人の足下、天皇制批判さえ放棄した先にある今。分断さ

れ抛り所なく俯く人たちと、「精神的なゆとりを持たせてくれたのは、日本人の青年と握手をかわしたときの感動です(195ページ)」という金の言葉を共有したい。

カードルの任務は指導ではなく主導である

キム・ヨニル

「二国一党」はこれまでも、社会主義や共産主義は間違いだという例証として挙げられてきた。日本での社会主義・共産主義運動の誤りも、国際共産党日本支部、つまりコミンテルンの誤りだと説明されてきた。しかし、からだをはって闘いぬいたキム・サンテ

本書は、1966年の善隣会館占拠闘争における朝中日の連帯を契機として発足した朝鮮革命運動史研究会(『世界革命運動情報』レポルト社)の成果の一つとして読み継がれてきた。階級解消論は被抑圧者の差異を捨象するものとして批判されてきたが、差別と収奪は階級抑圧として現れるのであり、朝鮮人民においては「民族か階級か」ではなく「民族も階級も」なのである。だからこそ、飯場において「朝鮮人のオヤジである

ということで遠慮したのでは、これは階級的にならないと思う(196ページ)。「ただ一つの前衛党」については留保しつつも、誤りを重ねながらも合理化せず率直に認め克服しようとする誠実な組織と実践は、我々が関わる大衆運動においても極めて重要である。リベラル民主主義はブルジョア道徳に基づき形式に過ぎないが、任務と服務に基づくプロレタリア民主主義は批判を恐れぬ。カードル(中核的活動家——キム注)になることを恐れるな!